フッサールの他我構成論批判

小林秀樹

はじめに

他者経験の解明にあたり、フッサールが他者に対置されるべき「私」をどのように理解していたのかを明らかにし、他者経験の問題を受動的綜合の問題として再提起し直すこと、それが本論考の目的である。

周知のように超越論的相互主観性を構成するために、フッサールは他者経験そのものの現象学的解明を重視し、『デカルト的省察』（一九三一）（以下『省察』）の第五省察においてその課題に取り組んでいる。しかしフッサールによる他者経験の解明は、K・ヘルト(1)に顕著に代表されるように、まず自己移入（Einfühlung）による類比化的統覚（analogisielende Apperzeption）の理論として、その妥当性について批判される。このフッサールの他我構成論にたいする批判には、妥当な面が少なからず認められよう。だがそこで指摘される批判以前に、他我構成論においては、そもそも他者に対置されるべき「私」あるいは「自我」の位置づけが、曖昧なままになっている。この曖昧さは、フッサールの他我構成論全体を貫いており、第五省察の理解にとって重要な焦点となっていると言える。

そこでまず本論考では、フッサールの他我構成論をヘルトによる批判とともに検討し、その批判の妥当性を検証する（第一章）。次にヘルトによって論じられなかった他我構成論の問題点として、第五省察における「私・自我（Ich）」概念について、『イデーンⅠ』(2)（一九三一）や『省察』にもとづいて考察する（第二章）。ここでは現象学的還元の過程で自我概念の動揺が由来してくる根拠が中心的な分析課題となる。そして他我構成論における根本的な問題点が、この自我概念の動揺にあることを明らかにする。

第一章　他我構成論とその問題の指摘

1　他我構成論の概略

フッサールは、現象学的還元によって開示される超越論的主

観性の領野、すなわち志向的体験の領域を「私に固有なもの（das Mir-eigene）」を構成する志向性からなる全体的連関へ還元する。この操作は「主題的判断中止」と呼ばれ、「私の超越論的で具体的な自我自身への還元」（I,125）を意味している。この領域に見られる現象は、他者に直接にまた間接に向かう志向性のあらゆる構成能作を捨象されており、その結果この領域は、「固有領域（Eigenheitssphäre）」もしくは「原初的（primordial）領域」と呼ばれる。したがってこの領域における超越論的対象からは「すべてのひとにとって」という意味も捨象されることになる。この操作は、他我（alter ego）、すなわち「異他なる主観（Fremdsubjekt）」に向かう志向性の構成能作を明らかにするための操作であり、この領域は原初的領域として、自我にとって異他的な（fremd）性格を有する対象の志向的構成のための基盤となるのである。

フッサールはこの還元の段階において、志向対象を具体的内容としてもつ自我を「モナド（Monade）」と呼び、超越論的自我によるモナドとしての自己統覚を論じる。この自己統覚が「世界化的自己統覚」であり、フッサールはこの統覚に身体を通じた意識の実在化という役割をみている。この自己統覚されたモナドとしての意味は、超越論的自我によって他の自我が構成される際に生じる意味の移し入れの基礎とされる。この移し入れが、自己移入と呼ばれる働きであり、次のようにして生じる。

他者は、まずこの原初的領域のうちに物体として現出するが、超越論的自我は「ここ」にある私の身体と「そこ」にある物体との間で類似性にもとづいた「対化（Paarung）」を生じる。フッサールの説明によれば対化に特徴的であることとは、「二つの与件が際立って直観的に与えられ、そしてそれに基づいて、本質的にすでに純粋な受動性において、それらが注意されているかどうかに関わりなく、二つの与件が異なって現出するものとして現象学的に類似性の統一を形成し、したがってまさに対として構成される」（I,142）ということである。対化は、対象を統一的に対をなして際立たせ意識に与えるだけではなく、同時に相互に意味を相手へと移し合い、重なり合うのである。こうして対化は、自己統覚されたモナドの意味を「私がそこにいるかのように（wie wenn ich dort wäre）」「そこ」にある物体に移し入れ、他者の身体を構成するのである。この一連の働きを指して、フッサールは「類比化的統覚（analogisierende Apperzeption）」と名づける。

しかし他我は、あくまでも「そこ」における物体の現前化に結びついて、間接的に共に現前するだけである。この「そこ」にある物体の現前化に結びつきつつ、私ではない他の自我を「共に現前させる作用」をフッサールは「付帯現前化（Appräsentation）」と呼ぶ。この意識の働きは、想起や予期や想像といった準現在化（Vergegenwärtigung）の作用と異なり、私が直接的には充実することができない他者経験に特有の準現在化の働きを意味する。他者の他者性とも言うべき「根源的な到達不可能性」は、この付帯現前化の間接性によって保証される。こうして「そこ」に現れる物体は、対化という「連合の意

味付与の過程全体に応じて、（私がそこにいるかのように wie wenn ich dort wäre）そこという様態において、今共に現に存在する自我として付帯現前化される」（I,148）のである。

しかしここで批判されるのは、上述した仕方で構成される他者が、真に他者足り得るものとして構成されているかということである。そこで次にヘルトによる批判の検討を通じて、フッサールの他我構成論の問題点を探ることにしたい。

2　ヘルトによる他我構成論批判

ヘルトはフッサールの「私がそこにいるかのように（wie wenn ich dort wäre）」という記述に注目し、この理論が、他者についての定立的な意識に到達しておらず、「自我の擬似二重化」にしか行き着かないとして、類比化的統覚の理論に含まれている問題点を見事に析出している。

ヘルトの分析によれば、「私がそこにいるかのように（wie wenn ich dort wäre）」というフッサールの定式化は、意識がもつ次の二つの準現在化（Vergegenwärtigung）の能力の合成であるとされる（Held,34ff.）。つまり一つは①「私自身の共同現在的な想像変化に関する擬似定立的な原初的な準現在化」であり、もう一つは②「私の顕在的な現在がより以前にまたはより以後に変化したものに関する定立的な原初的な準現在化」である。①は、現在「ここ」で機能する私の意識を、「あたかも私がそこにいるかのように（als ob ich dort wäre）」、同時に「そこ」にある物体（他者の身体）に見て取るという想像の働きである。また②は、「私がそこにいるなら（wenn ich dort bin）」あるいは「もし私がそこにいたら（wenn ich dort wäre）」という定式によって示される。具体的にこの準現在化とは、現在「ここ」で機能する意識が、過去や未来に「そこ」に身を移したとしても、変わらずに機能することに関する想起や予期の能力に基づいた定立的意識である。

この二つの準現在化を一つの定式のうちに述べることによって、フッサールは「そこ」に現出した物体（Körper）に私と同じ機能をもつ身体（Leib）という意味を構成することができると考えた。だがヘルトによればそれぞれの準現在化は、当該の対象にたいし、①が機能する自我としての同時性を、そして②が他我としての定立性を付与する役割を担うものである。つまり類比化的統覚は、等根源的な資格をもって機能する「共同主観（Mitsubjekt）」の定立的意識を、二つの準現在化能力によって合成するものでしかないのである。

この分析になぞらえて言うなら、類比化的統覚の理論において、私の身体と類似した物体が「あたかも私がそこにいるかのように」振る舞い、「私がそこにいるなら」実際にそのように振る舞うことができるからといって、「そこ」にある物体が他者として確認されることにはならないのである。想像の中でその想像をいくら充実する付帯現前化が生じたとしても、それはあくまでもその対象に対する擬似定立的な意識でしかない。したがってヘルトは、フッサールの他我構成論では他者についての定立的な意識には到達できず、類比化的統覚の理論は他者経験

の解明に失敗しているとする。

しかしヘルトは、この二つの準現在化の能力の合致が「他者を主題的に意識する場合の意識の特定の諸形態のもとで実際上生じている」ことがあり、しかも定立的なものとして生じていることがあるとする（Held,45）。そのため、こうした意識が成立するために、フッサールの類比化的統覚の理論には、なんらかの補足が必要となる。ヘルトによれば、それは類比化的統覚の理論において、すでに前提とされていたがフッサールには見出されなかった第三の準現在化の能力である。彼はすでに述べた二つの準現在化の能力と等根源的な準現在化の能力として、ここで「同時的に共同的に機能する主観が、なるほど非主題的にではあるが、しかし定立的にともに意識されるような他者を経験する付帯現前化」（Held,45）を提起する。

意識のこの第三の準現在化の能力をヘルトが提起したのは、他者経験の解明の根底にあってすでに行き詰まっているフッサールのテーゼを修正に導くためである。ヘルトは「第一の疎遠なものとしての共同主観を主題的に意識することが、共通の世界に関する意識を基礎づけている」（Held,45）というフッサールのテーゼに対し、その基礎づけ関係を逆転させようとする。つまり「私の世界とその世界のうちに与えられているものが、非主題的に共に機能している他者によって共に把握されていること、このことの付帯現前化が、この他者そのものの主題的で統覚的な把握の基礎となっている」（Held,45）とみなすのである。

「基礎となっている」ということは、時間的には一方の意識の遂行様式が、他方の後に続くという発生的事態を示唆している。つまりヘルトによると、他者経験についての本源的意識は、他者についての主題的意識ではなく、非主題的に共に機能している他者の付帯現前化の意識であるとされる。そのため先の基礎づけ関係の逆転によって、「他者についての主題的意識は、なるほど能動的発生のうちで成立するが、この発生自身は共同主観の受動的構成を前提する」（Held,50）こととなり、ヘルトは他者経験の解明に対し、新たな受動的構成という問題領域を切り開く。ヘルトに依拠するなら、先に述べたフッサールの類比化的統覚の理論は、すでに何らかの仕方による共同主観の受動的構成を前提とした上で展開されたものに他ならない。

第三の準現在化の能力は、他者を主題的に把握する意識ではないことから、フッサールの類比化的統覚の理論の枠外に見出すほかない。この準現在化の能力について論じる場合には、原初的領域の「そこ」に他者が物体として現れるような他者に関する主題的想定は、すでになされていないからである。この準現在化の能力は、共同主観の受動的構成にもとづいて保証されることで、類比化的統覚の理論の暗黙の前提として機能するものと考えられる。

しかしヘルト自身が、共同主観についての受動的構成の理論を指摘しておきながら、「この課題に取り組むことはここではできない」（Held,50f.）として、この問題に関する具体的論述を避けてしまっている。そのため第三の準現在化の能力、すなわ

ち非主題的に、だが定立的に他者を経験する付帯現前化の意識が、いかにして可能となるかの方途は明らかにされずに終始したのである。

ヘルトの考察が到達したように、超越論的相互主観性の理論は、すでにそのうちに発生的分析の課題を含むものであった。実際フッサール自身の類比化的統覚の理論のうちにも、すでに「対化」という「受動的綜合（passive Synthesis）」の概念として、発生的分析の課題が登場している。しかしヘルトはこの「対化」を重視することなく、それについてほとんど論及していない。フッサールは他者経験の解明を静態的分析として構想する一方で、「連合（Assoziation）」の根本形式である「対化」の概念によって、この解明過程を「他者という様式を構成する連合の進行過程（Gang）」（I,147）としても記述している。フッサールの類比化的統覚の理論に対してなされたヘルトの批判は、フッサールの考察が静態的分析として構想され、実際に考察がなされたと理解する限りにおいて妥当する。しかしフッサールの分析内容にこのような発生的分析が含まれていたことについて、ヘルトはそれを放置してしまった。

ヘルトは類比化的統覚の理論の前提に、共同主観の受動的構成の層があると指摘する。だが他者経験の解明が先に述べた「連合の進行過程」としてもフッサールによって考察されていたことを鑑みると、フッサールの他我構成論を単純に静態的分析として考察することは、必ずしも十全な解釈であるとは言えないであろう。問題は、ヘルトにおいては考察されることがなかった他我構成論に含まれる発生的概念の混入をどのように評価し、その由来をどのように明らかにするかということになろう。

この問題に解明の手がかりを与えるのが、「第五省察の思考過程全体が二義的（zweideutig）である」というI・ケルンによる指摘である。ケルンは、第五省察における問題が、「超越論的他我の反省的 ― 哲学的な基底づけ（根拠づけ）と自己および他のモナドの超越論的関係」であるのか、それとも「『自然的』、『世界的』な自己移入の基底づけ（動機づけ）の構成的分析」であるのかが曖昧であると指摘した[3]。フッサールの意図からすれば、彼が第五省察において目指したのは超越論的な相互主観性であり、決してケルンの指摘した後者を問題とした訳ではない。だがヘルトによる分析は、まさにフッサールの意図と異なり、類比化的統覚の理論が、内容的には後者の分析を指すものとして理解されている。その理由はヘルトがフッサールの静態的分析という構想にしたがうことで、他我構成論における発生的分析に関する考察を放置したからである。すなわちヘルトにおいては、何らかの仕方で共同主観の構成が前提とされており、そのうえであたかも身体の類似性から類比推理により他者であることを認識するような意識が考察されている。他者の定立的意識は、その際すでに他者の非主題的な付帯現前化によって獲得されているのである。

われわれはヘルトによる批判が、他者経験の解明を静態的分析として構想する限りにおいて、一定の有効性をもつということを確認した。だがいまやそれ以前に、フッサールの他我構成

論が発生的分析を含むものであることを正当に評価した上で、ケルンが指摘した第五省察の持つ二義的性格について考察を行う必要がある。第五省察の持つこの性格は、他我構成論に含まれる発生的分析と関係している。この二義的性格が由来する根拠は、類比化的統覚が論じられる以前の段階に求められ、他者経験の解明の場面における〈超越論的自我〉と〈省察する自我〉とをめぐる自我概念の動揺に端を発している。そこで次にこの二つの自我概念の動揺について明らかにする。

第二章　「私(自我)」概念の他我構成論への影響

1　『イデーンⅠ』における純粋自我の概念

何よりも他我構成論における問題の所在は、〈現象学的に省察している私(自我)〉と〈純粋(超越論的)自我〉との相違とはいえないか。このことを明らかにするには、これらの自我概念を明確に規定する必要がある。そのためにまず『イデーンⅠ』の記述をたどりつつ、〈純粋自我〉の存在性格について明らかにしたい。我々はその一連の考察のうちに、他我構成論において問題となる自我概念の動揺が、胚胎していることを確認することができる。

フッサールは『イデーンⅠ』において、自然的態度の「一般定立」を「遮断」、「括弧入れ」すること、すなわち「現象学的判断中止」を行うことによって、環境世界のうちにある私が「現象学的残余」としての「純粋意識」もしくは「超越論的意識」(Ⅲ-1,68)を獲得する過程を示す。純粋意識の流れのうちに見出されるコギタチオ(意識作用)は、コギトすなわち「私は思考する」という形式によって主題化され、このコギトには志向的客観へ向けられた「眼差し(Blick)」が含まれる。この志向的客観への眼差しを発するものとされたのが「純粋自我(reines Ich)」である。純粋自我は現象学的還元による残余としての意識諸体験において、諸体験の現実的可能的変動にもかかわらず、諸々の体験を通じ不断に絶対的に眼差しを放つものである。したがって純粋自我は「自我(Ich)」であるにもかかわらず、実在的性格を持つものではない。純粋自我は「作用の『純粋』主観」として、超越論的に純化された意識体験との関係のうちでのみ論じられるべきものである。すなわち意識体験との関係において、「体験作用をする自我は取り出されることができたり、一つの研究の客観になされるようなものでは全くない」(Ⅲ-1,179)。純粋自我に関しては、志向的客観を眼差す際の「関係の仕方(Beziehungsweise)」や「態度の取り方(Verhaltungsweise)」を除けば、「全く空虚であり、それ自体としては記述できない」(Ⅲ-1,179)ものである。

純粋自我とは以上のような存在性格を持つものであり、われわれが日常経験する自然的態度における自我とは異なっている。フッサールは身体や心理的なもの一般、また心理物理的統一体としての人間などをも還元の対象にしている。結局それらは、あらゆる種類の実在と同様、超越論的には志向的構成による単なる統一体として、すなわち体験の志向的構成要素である

ところのノエマとして、分析の対象とされるのである。

しかし諸々の意識作用が、コギト（「私は思考する」）という形式によって示されるとすれば、純粋自我はあたかもこの表現をもって、この表現における「私」を意味するかのように理解されがちである。そしてこの「私」という表現は、現象学的に判断中止をしつつ省察するこの私を意味し、自我としての同一性を主張するように思われる。つまり純粋自我を、人間であるこの省察する私と同一視する誤解が生じるように思われるのである。

問題とされるべきは、〈純粋自我〉と〈現象学的に省察する私〉との間の相違を明確に関係づけることであろう。つまりこの実在する人間としての「私」が、純粋自我との関係において現象学的にどのように問われうるかが問題なのである。しかしフッサールは、反省を行うこの私も還元されるのかという問いに対しては、ただ「現象学者としてわれわれは、自然的人間であることをやめるべきはずもないし、また論述のうちでも自らを自然的人間として定立することをやめるべきはずもない」（Ⅲ-1,137）と述べるにすぎない。つまり現象学的に省察する私は、論述のうちでも自然的人間なのであって現象学的還元や志向的分析の対象として考えられておらず、その結果論述されないままに終わっているのである。

フッサールのこの〈純粋自我〉と〈省察する私〉との関係に関する論述上の空白は、純粋意識の絶対的存在領域とその志向的一般構造の析出を目指す『イデーンⅠ』における主題限定の結果として考えられる。『イデーンⅠ』では、自我そのものへの反省と自我の構成という問題、換言すれば、自我そのものの純粋自我による構成という問題についての言及は、意図的に注意深く避けられているのである。しかしその結果、「私」や「自我」という言葉を媒介にして、〈純粋自我〉と〈省察する私〉とは容易に結びつき、その関係については、詳細に問われることのないまま交錯することになる。したがって純粋自我は、経験的・実在的自我主観との相違を意識されることなく、それと誤解される恐れを孕んでいるのである。

もっとも『イデーンⅠ』では他者存在が論述の主題となることが回避されているため、こうした曖昧な自我概念の規定でも問題は生じずに済んでいる。しかし『省察』においては事情が異なってくる。そこで、この自我概念の動揺という観点から、他我構成論における二義的性格について考察しよう。今確認した自我概念の混乱が、他我構成論のうちにどのような形で影を落としているのかを次に解明する。

2　『省察』における自我概念の動揺とその影響

『省察』においてフッサールは、他者経験の解明を静態的分析によって行いうると構想した。この静態的分析とは、志向性の三項構造（自我―意識作用―意識対象）のうち、意識作用と意識対象との志向的相関関係の本質分析をその中心課題とする。静態的分析において省察する自我は、すでに対象的意味の

発生を経た自我すなわち「発達した自我（entwickeltes ego）」（I,113）であるとされ、自我に沈殿した具体的意味が時間的発生関係において分析されることはない。もっぱら静態的分析では、自我の意識体験における意識作用と意識対象との志向的関係の本質分析が主題なのである。

第五省察の中でフッサールは、「現象学的判断中止によって、私を私の絶対的な超越論的自我に還元」（I,121）し、その際「省察を行う私は、超越論的自我としての私」（I,130）であると述べている。この時『イデーンI』におけるのと同様、〈省察する自我〉と〈超越論的自我〉は、相互の相違そのものについてはなんら問われることのないまま重ね合わされている。つまり『省察』においても、現象学的に省察する自我は一人の自然的人間としての私であり、〈超越論的自我〉と〈省察する自我〉との関係についてはやはり不問に付されている。そのために「私の」という人称的意味は、現象学的還元によって遮断されるはずであったにもかかわらず、〈省察する自我（私）〉のうちに還元後も維持されることになる。その結果、静態的分析における〈超越論的自我〉は、〈省察する自我〉との関係を不明にしたまま、「私の」〈超越論的自我〉として暗に前提されるのである。

「私の」としての人称的意味は、本来志向的構成の統一体、すなわちノエマとして統覚されるはずであったが、〈超越論的自我〉が「私の」という意味を還元しきれていない点に、フッサールの他我構成論のそもそもの難点が見出されるのである。その当然の帰結として、還元によって開示される超越論的経験領域もまた、省察する「私の」超越論的経験領域を意味することとなる。すでに第一章において確認したように、他我構成論では、〈省察する自我〉は固有領域への還元を行うとされた。だが、超越論的経験の領野を「私に固有の」領域へと還元する操作は、〈省察する自我〉の持つ「私」という意味を前提にしなければ不可能なのである。

以上のようにフッサールによる他者経験の志向的構成能作の解明は、「私」という意味について不問に付されたまま分析が進められている。その結果、他我構成論においては、超越論的自我や固有領域への還元において自己統覚された精神物理的自我（あるいはモナド）といった自我概念が、「私」あるいは「自我」という表現を介して〈省察する自我〉に静態的分析の構造上結びついており、それらが「私の」超越論的自我や「私の」モナドであることについては分析の俎上にのぼることがない。そのため、フッサールの分析の各段階における自我概念は、「私」という意味をめぐって交錯し重なり合い、概念的動揺をきたすこととなるのである。こうして我々は、他者との関係性を既にそのうちに孕むこの「私」という意味が、他我構成論のどの段階において問題とされているのか不明瞭なまま他者経験の分析を行うこととなり、絶えず混乱した状況におかれることとなる。

我々がその混乱した状況にはっきりとした答えを与えられるのは、「他者（Andere）は、現象学的には私自身の変容態として

現れる（私自身は、今や必然的に生じ対照をなす対化によって、この私のという性格を自らの側で獲得する）」（I,144）というフッサールの対化に関する記述に出会うことによってである。ここでわれわれは、初めて明確に「私の」という性格が、対化によって獲得されることを知ることができる。

『省察』における他我構成論は、もっぱら自己移入による類比化的統覚の理論として理解され、批判を受けるが、他者経験における最も原初的な意識能作はこの対化であったことに注意すべきである。すでに述べたように、フッサールは連合の根本形式であるこの対化という受動的綜合の概念を用いて、本源的な他者経験の過程を「他者という様式を構成する連合の進行過程（Gang）」（I,147）として記述する。つまり対化とは、固有領域に現れる物体（いまだ他者の身体という意味を持たない単なる物体）を、類似性に基づいて私の精神物理的自我と対関係をなして受動的に現出させる働きを意味している。受動的に対をなして現出させるということは、物体の類似性から身体であることを、さらに身体であることから他の自我であることを類推するような高次の意識能作ではない。対化は、心身共に一体である精神物理的自我として、受動的に一挙に自らを呈示してくるような低次の意識能作として解されるべきであろう。

このようにフッサールの対化に関する記述を重視し、他我構成論を「連合の進行過程」として把握することができるならば、当該の意識作用の主観は、経験的実在的な「私」という意味を沈殿させる以前の〈超越論的（もしくは純粋）自我〉として、〈省察する自我〉との区別を前提とするものでなければならないことになろう。

フッサールの類比化的統覚の理論が、単なる『自然的』、『世界的』な自己移入の基底づけ（動機づけ）の構成的分析」のように把握されるのは、省察する自我と各構成段階における意識作用の主観との関係が、静態的分析においては論じられないまま省察する「私」に結びついているからに他ならない。「対化」、「自己移入」といった他者経験の一連の分析において、その意識作用の純粋主観（超越論的自我）が〈省察する自我〉の「私」という意味を含意していることによって、自己移入による類比化的統覚の理論は、単なる類比推理の様相を呈するのである。しかし対化に関するフッサールの記述を無視するのでなければ、これまでの考察から生じてくる新たな問題は、〈超越論的自我〉と〈省察する自我〉との関係をどのように現象学的に分析するかという問題であり、また同時に「私」という人称的意味の発生をその中でどのように問いうるかという問題でなければならないはずである。

フッサールは第五省察に先立つ第四省察において、「超越論的自我自体の構成の問題」（I,99）が「我々の描写の大きな間隙」（I,100）としてとどまっていることを指摘した。第四省察における分析によれば、〈超越論的自我〉は意識能作の中心、すなわち単なる「空虚な同一性の極（Identitätspol）」であるというだけではなく、〈省察する自我〉の反省に先立って常に機能している自我として理解される。自我は、常に「内的時間意識（innere

Zeitbewußtsein)」において、経験する生の流れとして、またその全体として統合されるのである。そのような機能によって初めて、意識体験の流れも反省によって把握されることができ、自我が「体験の同一極としての自我」や「習性の基体としての自我」(I,100) であることも可能となっている。

この「超越論的自我自体の構成の問題」は、対象構成を内在的時間性における自我の自己構成として捉える発生的分析の課題である。そこでこれまでの論考から、今後フッサールに内在的にしかも発展的に他者経験を解明していくための方向性を指摘することができよう。それはまず〈超越論的自我〉と〈省察する自我〉との関係を「超越論的自我自体の構成の問題」として、意識体験の流れのうちに明らかにする方向である。この方向は自我の自己時間化の問題として追究されねばならない。また他方で、省察する自我のもつ「私」という人称的意味が、既にみた「対化」に関する記述において相即的に他者と関わることが明らかである以上、他我経験に関する分析は「私」という意味の発生と絡む「連合」すなわち「受動的綜合」の問題としても提起され、解明されなければならないであろう。

これらの問題は、他者経験の解明にとって本質的な問題であるにも関わらず、「われわれの描写の大きな間隙」のうちに潜んでいた。フッサールは第四省察において展開される発生的分析を他者経験の解明に持ち込むことが十分にできなかったのである。その足かせとなった理由は、静態的分析という構想によって〈超越論的自我〉と〈省察する自我〉との関係が分析の俎上にのせられることがなかったためであり、フッサール自身がこの二つの自我の関係について現象学的な考察を行わなかったためなのである。

以上の考察から、自我の自己時間化と連合という問題が、他我構成論をめぐる考察の発展的課題として見出され、他者経験の解明に寄与すべき新たな課題として位置づけられる。

結　語

フッサールの現象学的分析は、常に維持される現象学的還元という反省の舞台上で、私の諸経験に関して行われる意識の志向的本質分析である。この時反省の舞台設定をしている私は、絶えず意識されないまま暗黙のうちに存在している。フッサールは現象学的考察において生じるこの事態を「自我分裂(Ichspaltung)」と呼ぶ。すなわち現象学的考察では、日常的な「私」の意識体験が分析対象とされるが、同時に匿名的に反省の舞台設定をする私が絶えず関与しているからである。この超越論的反省の舞台設定をする私をこれまでと同様〈現象学的に〉省察する私〉と表記するなら、反省の場面では、その舞台を設定し〈省察する私〉と分析の対象となる「私（の意識体験）」とが存在し、しかも内的時間意識の綜合によって、自我としての同一性を維持していることになる。

現象学にとって他者が困難な問題となるのは、他者が他者についての私の経験として、〈省察する私〉の反省の俎上にのせら

れてしまい、〈省察する私〉そのものとの関係を問われることがないからである。フッサールは、『イデーンⅠ』や『省察』において曖昧であった〈超越論的自我〉と〈省察する自我〉との関係に関して、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（一九五四）[4]において、徹底的に首尾一貫した判断中止について言及している（VI,185ff.）。そこでフッサールは、これまで「私の」という人称的意味を密かに冠していた〈超越論的自我〉を「原自我（Ur-Ich）」と呼び、規定し直すのである。フッサールによれば、それは他に呼びようがないので曖昧なまま「私」と呼ばれていたが、それ固有の意味では、「私」という人称的意味をもたない自我極と規定されるものである。

本来ならフッサールが言う「超越論的他者」とは、同様に構成された世界をもつ他の共同主観、すなわち異他的（fremd）な原自我のはずでなければならない。しかしフッサールの他者経験の解明においては、他者についての「私の」意識体験を志向的に再構成することが目指されるため、〈省察する私〉そのものの在り方と他の共同主観の在り方との関係は、問われないまま絶えず背景に退いている。フッサールの他我構成論は、この点に根本的な難題を抱えている。

ヘルトの批判は他者についての本源的意識を、他者を直接的に主題とする意識から、他者についての非主題的意識へと変更する。それによって〈省察する私〉の反省が直接及ばない段階、すなわち受動的構成の段階に共同主観の構成を位置づけるのである。しかしフッサールの他者経験の解明は静態的分析だけでなく、発生的分析を含むものであった。われわれはこの点を考慮しつつ、第五省察の持つ二義的性格が自我概念の動揺に由来することを明らかにした。第二章における考察によれば、他者経験の志向的構成能作の解明は、分析の各段階における自我概念が「私」という意味を暗に前提とすることで、単なる類比推理として理解されてしまい、対化という「連合の進行過程」としては理解されないのであった。しかし対化に関するフッサールの記述を無視するのでなければ、われわれは、〈超越論的自我〉と〈省察する自我〉との関係を「超越論的自我自体の構成の問題」として提起し、他者経験の解明を「私」という意味の発生と絡む「連合」すなわち「受動的綜合」の問題として、再度提起することができるのである。

したがって、「連合」すなわち「受動的綜合」をより詳細に分析していくことによって、はじめて自己時間化による超越論的自我の自己構成を、具体的な諸相において明らかにする方向が模索されることになろう。そしてその具体的な諸相を明らかにしていくことを通じて、他者経験の解明における一つの鍵である「対化」が生じる場面を見定め、分析することが期待できる。

註

本稿でHusserlianaから引用・参照した箇所についてはその巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で本文中の括弧内に

記した。なお訳文では、原文にあるゲシュペルトおよび、斜体字による装飾は省略してある。

（1）Klaus Held, Das Problem der Intersubjektivität und Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie, in: *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, Phaenomenologica 49, 1972.
引用した箇所については、例えば(Held,45)のように本文中にページ数を示した。

（2）底本としては Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie : Erstes Halbband. Texte der 1. 2. 3. Auflage, hrsg. von Kahl Schuhmann, Kluwer Academic Publishers, Dordorecht/Boston/London, 1995 ; Zweites Halbband. Ergänzende Texte(1912-1929), hrsg. von Karl Schuhmann, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1976.を用いた。邦訳として、渡辺二郎訳『イデーン―純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』（みすず書房）のⅠ-Ⅰ（一九七九）とⅠ-Ⅱ（一九八四）を参考にした。以後も表題を略して『イデーンⅠ』とする。

（3）Iso Kern, Husserliana Bd. XV, Einleitung des Herausgebers, S. XIX f.
フッサールの意図はあくまでも他我(alter ego)の超越論的な根拠づけと、自我と他我との超越論的関係解明にある。そのため他我構成論が「『自然的』、『世界的』な自己移入の基底づけ（動機づけ）の構成的分析」と理解されることは、フッサールの意図と異なった、いわば第二義的な理解であると言える。

（4）Edmund Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaft und die transzendentale Phänomenologie*, 2. Auflage, hrsg. von Walter Biemel, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1976.

（こばやし・ひでき　筑波大学大学院）